

あるモノのお話

赫い月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新しく生まれた妖怪であり主人公の紅月。
巫女の霊夢や魔法使いの魔理沙とともに
異変を解決したり宴会で馬鹿騒ぎしたり
そんな彼女にはある秘密があったり：
幻想に住む少女たちの織り成す物語。

目次

序章

はじめり	1
名前とすべるカードと能力と	4
初めての家と食材	9
弾幕ごっこの練習、というか初陣	14
人里到る道は遠く	20
人里到る道は遠く…	24
懐憶と激情	30
謎との解析	36
新居と制約	42
鍛錬って辛くない？	46
紅魔異変	
初めての異変	52

序章

はじめり

心地の良い日差しと小鳥の鳴き声が私を目覚めさせる。

「んん…ふああ…朝…」

今日もよく晴れている。ここ数日で暑さも和らぎ、代わりに少し肌寒くなってきた。

「…ううつ。寒くなってきたなあ。そろそろ雨風凌げる家が欲しいなあ」

私はつい一年ほど前に生まれた妖怪だ。まだ定住できる家を持っていない。近くに川があるのでいつもはここら辺で適当に寝ている。人間の住む人里とやらに行けば家がいっぱいあるらしいけど…。この土地の地理に強くない。どこに何があるかわからない。頼れる友がいればよかったけど…生まれてこの方人も他の妖怪も見たことない。

「…自分で作ってみるかなあ」

もちろん建築の知識なんてあるはずないが。

「よし、やってみよう！まずは材料集めだよね。」

私がつている家の形では…木がいっぱい必要だ。あと…うーん？ないか。とりあえず木を切ろう。

「…いやいやいや、どうやって。刃物も何もないよ。素手…は流石に無理か。」

早速手詰まり。妖怪だけどそんなに力ないし。

「…そういえばお腹すいた。なんか食べよ」

確か昨日取ったキノコの残りが…あったあった。あとはこの塩をまぶして焼いて食べよう。火を起こして…地味に大変だよね、これ。「魚取れなかったからなあ。」

今更だけど毒とかないよね」

茶色単色のキノコ。毒々しい見た目もしてないし。多分大丈夫だよね。

「ま、ダメだったたらダメだった、って事でいざ、投入。」

「あー！ちよつと待ったあ」
「うひゃあ!？」

急に声をかけられた。背後から急に声をかけるとか…

「それ！そのキノコ見せてくれ！」

「こ、これ？…ど、どうぞ…」

人間…？初めて人を見たのもそうだけど、そういう感情じゃなくて勢いというか…怖い。

「やっぱそうだ！おいお前！これ私にくれ！」

「へ？…いいけど。私のご飯が…」

キノココレクターかな？そのキノコどこにでもありそうだけど。それはそうと朝ごはんがなくなった。

「こりゃいいもらいもんだ！研究が進められるぜ。おっと、自己紹介してなかったな。私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ☆お前の名前は？」

「私…」

なまえ…名前か。そういえば人間にはそんなのがあるんだった。いや、妖怪にもあるか。…名前かあ。

「私、まだ名前ないです。生まれてまだ一年なので」

「一年？…ああ、お前妖怪かあ！随分大人しいから気づかなかったぜ！そうだなあ。妖怪なら霊夢んとこ行った方がいいぜ」

「れいむ？なんで？」

「霊夢は妖怪退治とかやってるからな。悪い妖怪じゃないよーって言っとかないといつ退治されてもおかしくないぞ」

「え、退治？」

そんな無差別に退治するの？人間ってこわいなあ。…まだ死にたくはないし挨拶に行っておこう。

「その…博麗神社ってどこにあるの？」

「ん？ああ、そうか。こつからだとかかなりあるからな…おまえ、空飛べるか？」

「空？飛べるわけないでしょ」

鳥じゃあるまいし…妖怪は飛べるものなのかな？

「そうか。じゃ、私が連れて行ってやるよ。後ろに乗れ」

そういつて魔理沙は箒にまたがった。え？何してるのこの人は。まさかこれで飛ぶとか言わないよね？

「早くしろ！それとも歩いて行くか？こっからだと言が暮れるぞ？」

「わ、わかったよ。」

流石に半日歩き倒すのは嫌だ。ここはひとつ乗ってみよう。

「飛ばされないようしっかり掴まれよ？それじゃ、行くぜ☆」ドシ
ユッ

え？…え？空？なんで？地面が…って！

「まってまって！」

ほんとに飛ぶなんて…違うそれよりも落ちる！落ちる！

「飛ばすぜ！」バシユウウウ

「おちるううううう」

もうやだ。

名前とすぺるかーどと能力と

「…ふう、掃除完了つと。随分と暖かくなってきたわね」

うわああああああ…

「…？何かしら、叫び声？」

「落ちる！落ちる!!」

不味い！本当に不味いよ!?ああ…もうダメだあ。握力が…。一年の妖生楽しかったなあ…

「大丈夫だつて。ほら、ついたぜ」

た、助かった…急に飛ぶとか頭ないのかな？

「霊夢ー遊びにきたぜ〜」

「いらつしやい…新入り？」

「ああ。そうだぜ」

なんか二人で話始めちゃった、少し休憩と。すごい立派な建物だなあ、神社…っていうんだっけ？神様の住む場所だよな、妖怪の私が入っていいのかな。

「なるほどね。生まれて一年と名前ないのは不便ねえ…」

「ならいま決めちまおうぜ」

「そうね。どうしようかしら」

なんか勝手に決める流れになった。名前はあった方がいいからまあいいか。

「あなた、何か好きなものある？」

「好きなもの？」

好きなもの、ねえ…。花…に興味ないし、食べ物も茸と魚ぐらいしか知らない。うーん。

「あつ、月」

「なんだ？」

「寝る前に見えるまん丸の、月って言うんだよね」

あれは綺麗だと思う。

「そうね。…月、か。それだけだと味気ないわね」

「そうだな…紅月なんてどうだ？」

「紅月？…ああ、目の色ね」

目？私の目は赤いのか、初めて知った。

「どうだ？紅月ってのは」

「紅月…うん。紅月。」ニコツ

名前、なんか嬉しいな。紅月、私の名前は紅月。

「うれしそうで何よりだわ。さて、本題に入るわね」

「うん。」

「この世界にはルールがあつてね、戦うときはスペルカードルールつていうのを守らないといけないの」

「すべるカード？なにそれ」

「…うーん。説明が難しいわね。」

「百聞は一見に如かずだ！霊夢、やって見せようぜ」

「ええ？…まあ仕方ないか。ちよつと離れてなさい」

「うん」

数歩下がっておく。なにかなすべるカードつて、…なんか戦うとか言つてたな、物騒なものだつたりして。

「説明用だからスペカ見せ合う程度でいいか」

「そうだな。じゃ、行くぜ！」

なんか構えた。すべるカード…どんなのだろうか

『『夢符・封魔陣』』

『『魔符・ミルクィウェイ』』

瞬間、私はその光景に呑まれた。赤や青、黄色や緑。とにかく沢山の色の玉が空中で様々な形を成して動いている 綺麗だ。まるで夜の星のよう。

「綺麗…」

思わず声に出してしまった。ほんの数分ののち、二人は降りてきた、霊夢も空飛べるんだね

「今のがスペルカード。飛ばした弾丸みたいなのは霊力とか妖力とかを固めたもので当たっても多少痛いくらい。殺傷能力はほぼないわ」

「今のやつ枚数を決めて決闘するのがルールだ。喧嘩とかに使う

な」

喧嘩って…まあ人間と妖怪でも対等かそれはいいと思う。

「その…私にも出来るかな？妖力とか霊力とか扱ったことないから」

「ちよつと練習すればね」

「数日で出来ると思うぜ」

数日にでも？簡単なんだ。…やってみたいな。

「どうやればいいの？」

「まず妖力を把握しないと駄目ね。目を閉じて」

「うん」

言われた通りに目を閉じる。

「自分の思う妖力をイメージして。強くイメージしないとダメよ」

イメージ？抽象的な…妖力…妖力…。思い通りに動かせて、形とか硬さとかも好きに変えられる。目に見えない空気みたいなもの。

「難しかったら自分が妖力を使うのを想像してみて」

私が妖力を…なにに使ってるかな。刀とか作ってみたいな。もちろんすべるかーども。

「！紅月、できてるわ」

「すげえな！…こんな早く出来る奴見たことないぜ！」

「…??何にも…」

何にもできてくれない？さつきみたいな球も浮いてないし。空飛んでるわけでもないし。

「ほら、腰のそれ。あなたが作ったんでしよう？」

「腰？…あつ」

腰にさつきまでなかった刀があった。私が作ったんだ、想像してたのと同じ。試しに刀を抜き、葉を切ってみる

「…すごい、ちゃんと切れる」

切られた葉は2つに分かれ地面に落ちた。

「まだ慣れないかもしれないけど、使ううちに慣れるわ。…あつ、もう一つ説明しないとね。幻想郷の住民は能力を持つてるの。私は『空を飛ぶ程度の能力』、魔理沙は『魔法を使う程度の能力』みたいな感じだね。」

「へえ…私にもあるってこと？」

「多分な。たまーにない奴もいるけど」

「ない方が普通な気もするが。能力か、魔法を使えたりしたら楽しそう。」

「どうやったらわかるの？」

「まっつてね。それ専用の札があるから」

「そんな便利なお札があるんだ。」

「えーつと？…これか。はい、これに妖力を注いで」

「早速妖力使うんだね、こんな感じかな？」

「んっ」

「おお。なんか文字が出てきた。」

「精神的干渉を受けない程度の能力」

「精神的な干渉を？」

「また珍しい能力ね」

「精神的干渉ねえ。あんま戦闘には使わなそうだな」

「精神的干渉かあ。洗脳とかされない的感觉い？そんな状況こない方がいいけど。…まあそれよりすべるかーどだ。帰ったら練習しよう。自分であれが作れたら楽しいな。」

「見た感じ平和的な妖怪ね。一年人と関わらず生きてきたから、人を襲う心配もないだろうし。見た目は…まあまあ大人だけど精神は子どもっぽいし。」

「そうだな。すぐ顔に出てて面白い」

「貴方、どこに住んでるの？」

「住んでる場所？川沿い」

「そうか、地名とか知らないか」

「さっきあつた場所か？」

「うん。あそこらへんに住んでる」

「家は？」

「ない」

「ないのか？」

「うん」

欲しいけどね。作るに作れないし仕方なし。あ、でもこの刀で木は切れるかな?…流石に無理かな?

「…霊夢、居候させてやれば?」

「…別にいいけどその分働いてもらおうよ」

「いそうろう?」

いそうろう…なんだっけ。

「ま、要するにこの神社に住むってことだ」

「ここに? いいの?」

家ができるのは凄く嬉しい、けど迷惑ではないのか。

「まあ広いし別にいいわよ。けど掃除とか洗濯とか手伝ってね?」

「ありがとう。なんでもするよ!」

「先にいろいろ見てきたらどうだ? 私達は他に話すことがあるからな」

「わかった!」

家かあ。これで冬も寒くないし、雨で濡れないし…お布団もある! 霊夢と魔理沙には感謝しないとだね。

—

—

—

「…どう思う? 魔理沙」

「パツと温和な中級妖怪だが…妖力の量が異常だ。そういう種族なのか?」

「種族ねえ…」

「ま、そんな気にする必要ないだろ。あんな感じだしな」

「そう…でもなんか嫌な予感がするのよね」

「出た、霊夢の100%予感、今回に至ってはハズレだな」

「…そうだといいけどね」

初めての家と食材

「すごい…広い」

玄関、というか縁側？から入って
いろいろみて回って見たけど
いっぱい部屋があった。

お風呂や台所はもちろんのこと

居間みたいなものが四部屋くらいあった
「そうでしょ。私一人だと掃除が大変よ

…そうね、この部屋は好きに使いなさい
私はいつも向こうの部屋にいるわ」

「うん。ありがとう、霊夢」

「どういたしまして。私は部屋に戻るわ
何かあれば声をかけて。」

「はい」

…さて、いまからここが私の部屋だ。
結構広いなあ。畳っていうんだっけ？
それが10枚くらい張ってある。

「…そうだ！お布団出してみよう」
普通押し入れに入ってるんだよね。
・ あったあった！

「よいしょっ…と。」

わああ…ふつかふかだあ！」
私が想像していた以上に柔らかい。
今まで敷いていた草とは大違いだ
掛け布団もちゃんとある。

「…ちよつとだけ入ってみようかな」
まだ寝るつもりはないけど…
横になってみよう。

絶対に気持ちいいだろうなあ…！ゴソゴソ
「あったかい…落ち着く…」

すごいなあ、布団って。

ただの布に見えるけどちゃんと働いてる。

…すごいなあ…あれ。

なんだか…眠くなつてー

ー

ー

ー

「紅月？お昼できたわよ…つて

寝てるの？」

「…スウ…スウ…」

「…全く。早寝すぎるでしょう。」

「…スウ…スウ…」

「紅月、紅月！」

「…ん…んう？誰？」

あれえ？何っこ…

…あ。思い出した。

霊夢の家にいるんだった。

「誰つて…寝ぼけてないで

ほら、お昼ご飯食べるわよ」

お昼…そういえば

朝ご飯食べてないからお腹すいた

「向こうの部屋に用意してあるから」

もう用意してくれたみたい

人間は普通何を食べるんだっけ？

食卓に着くと見知らぬ食材が

並んでいた。

白い何かに茶色く濁った水

茶色い豆…

これは本当に食べるものなのかな？

「これ…なに？」

「何つて…ご飯に味噌汁

納豆だけど」

ごはん…ごはん…

雑穀みたいなものだろうか。

みそしる？…泥水みたいだけど…

「いただきます」ズズッ

うわ、泥水飲んだ。

なっとう。なにこれ…

なんか臭いしにちやつてした。

「食べないの？」

「…食べれるの？」

「そりやそうよ。」

騙されたと思って食べてみなさい」

…なっとうはともかくみそしるは

美味しそうな匂いがする。

飲んでみよう。

「いただきます」ズズッ

一口啜ってみた。

「…美味しい」

けどしよっぱい。

もうちよつと薄めた方がいい気がする。

「それ単体で食べるわけじゃないわよ。」

ごはんと一緒に食べたりするの」

ごはん？…ごはんと一緒に…

「ちよつ…手で掴んで食べるつもり？

箸使いなさい、箸」

はし…橋…端…箸か。

知識としては知っている。

けど使い方がわからない。

「どうやって使えばいいの？」

「親指と人差し指と中指で箸を挟んで

もう一本を親指の付け根と薬指で支えて。」

うん？親指と人差し指と中指で…
もう一本を…こうかな？

「そうそう。」

それで上の箸だけ動かして
物を挟んで食べるのよ」

上の箸だけ動かして…

難しくないですかね？

「…うーん。うまく取れない」

試しにごはんを掴むが大半は
掴めず落ちてしまった。

「それは慣れるしかないわね。」

「…うん」

これから食事に時間がかかりそうだ。

悪戦苦闘しながらとなんとか食べ終わった。

なっとうも意外とおいくて、

独特の匂いと風味だがごはんと

食べるとすごく美味しく感じた。

「ごちそうさまでした」

「なんか…あなた不思議よね」

「…なにが？」

「箸は知ってるのに米を知らなかったり…

知識が偏ってるわよね。」

「そうかな？」

普通が分からないからなんとも言えない。

ある程度の知識はあると思う。

難しい言葉はわからないけど…

「まあ妖怪なんてそんなものよ

何を元にして生まれたかでいろいろ決まるからね

鬼みたいに力だけ強くなったり

天狗みたいに飛ぶ能力が高くなったり。

そんな感じで生まれたときの知識も変わるわ」

「妖怪にもいろいろいるんだね」

てんぐというのは初めて聞いた。

飛ぶのが上手ってことは鳥みたいな感じかな？

「…でもいろいろ知ってないと不便よね。」

近いうちに寺子屋に行きましようか」

「寺子屋。知ってる」

勉強するところだったはず。

「知ってるなら話は早いわ。」

慧音に相談しておかないと…」

「けいね？なにそれ」

「寺子屋の先生よ。」

「へえ…」

「まあまだ先の話になるけどね。」

…さて、食器洗ってくるわ。

あなたは好きに過ごしてていいわよ」

「はーい」

寺子屋か、楽しそうだなあ。

いろんなことを知れるのは楽しそうだ。

「ふああ…食べたなら眠くなってきた」

そういえば半日だけで沢山のことがあった。

いきなり環境が変わったから

疲れたのかもしれない。

自分の家ができて安心したのかも。

「…いいや。寝ちゃおう」

好きにしていって言われたし。

まだ昼だけど寝てしまおう。

おやすみなさい。

弾幕ごっこの練習、というか初陣

霊夢の家に住んでから数日が経った。

その間は特に何もすることもなくのんびりと過ごしていた。

箸はまだうまく使えないままだ。

さて：今日は弾幕ごっこの練習をするそうだ。

現状、私はまだ弾幕を3つ程度しか出せないし、動かすなんてもつてのほかだ。

もちろんすべるカードも一枚も持っていない。

まあ二枚案は出してみただけ：

上手く作動したことがない。

「紅月ー。始めるから外に出なさい」

呼ばれた。

そういえば練習って何をするんだろう。

瞑想とかが始めはいいって魔理沙が言ってたけど。

「何するの？」

「そうねえ…何しようかしら。」

考えてないのかい。

…それもそうか。霊夢はもうすべるカードとか持ってるし、始めなんて忘れてて当たり前だ。

「…ま、習うより慣れろってことね。」

スペカは二枚でいい？」

「…ん？」

「いいわね？…じゃあ、始め！」

「ちよっ…」

いきなり実戦なの？絶対負けだよね？

しかも私空飛べないし。

「まずは小手調べね。」

そういうと霊夢は視界いっぱい

光弾を放ってきた。私目掛け飛んでくるのもいくつか

絶対小手調べの量じゃないよね…

適当に飛ばしてくる玉に当たらないように気をつけ
追尾弾を躲していく。…これでもかなり辛い。

すべるかーどを使われたら被弾確定だな…

「あら、かなり筋はありそうね。」

…でも避けるだけでは辛いでしょう？

自分で弾幕展開して相殺したり道具で

打ち払ったりしないとダメよ」

「…道具？例えば？」

「そうねえ。私はこのお祓い棒とか…

そういうえば貴方刀作れたでしょう？

それとかね」

「なるほど」

道具使っても良かったんだ。

じゃあ私も刀使ってみようかな。

…よいしょつと。う…意外と重いな。

もうちよつと刀身を短くしよう。

「準備はできたかしら？…じゃあいくわよ…」

『夢符・封魔陣』

きた、すぺるかーど。

やっぱりさつき以上に弾幕が展開されている…

霊夢を中心に同心円状に飛んできている弾。

あれを避けるのは簡単そうだ。軌道が読みやすい

ランダムに飛ばされるお札は厄介だな

まあ避けられるけどこれのせいで動きが制限されてしまう。

しかも霊夢は通常弾幕を狙って打ってきてる。

それを避けるのは相当な技術がいると思う。

ていうか飛べない私は絶対避けられない

霊夢に言われたように刀を使ってみる。

「…はあー」

一振り。自分でも驚いた。

振った刀からなんか出た。

…振った刀からなんか出たよ？

「へえ…刀から弾幕を打ったのね、
なかなか考えたじゃない」

刀から弾幕を？そんなことできるんだ。

無意識にでもできるもんだね。

…そういえば強く思えば妖力は
その思い通り動くんだっけか。

飛べたり…するかな？物は試し、やってみよう。
ギリギリで弾幕を避けつつ飛ぶ想像をする。

飛ぶ時ってどんな感じなのかな。

歩いたりするのと一緒だったり…

「なかなかやるわね。私のスペカを
集中せずとも避けられるなんて。」

何か言ってるけど聞き取れなかった。

まあいいや、飛ぶ。私は飛べる。

…うん??なんか浮遊感。

「…おお！飛べてるー！」

すごい、本当に飛べた。

なんで飛べなかったのが不思議なくらい。

「つと、危ない危ない」

飛べたことに感動して被弾しそうだった。

避ける空間が広がったから避けやすい。

「へえ…飛べるようになったのね。」

じゃ、私も少し本気になるわ」

本気じゃなかった…遊びだったの？

うっわ弾幕の密度すごいことになったんだけど
避けられるの？これは。

「避けられそうにない時はスペカ使うのも手よ？
相殺されて避けやすくなるから」

だから私はすべるかーど持ってないんだってば。

もう辛い。刀で防ぐのにも限界があるし…
ダメ元でやってみる？

やらなくてもどうせ被弾するし
やってみよう。

「…じゃあ私もすべるカード使うね」

私が最初に考えついたすべるカード
うまく使えるかわからないけど…

『月光・新月』

すべるカードを宣言してみる。

私の考えた通りに動けば…

「…へえ…やるわね、紅月。」

相手を無理やりブレイクさせるなんて」

…お？うまくいった？

おおお。すごい、想像した通りになっている。

さっきのすべるカードの効果は

宣言した時点で発生している弾幕を

「一時的」に消滅させる、って言うもの。

最初は相殺しようと思ってたけど、まだ弾幕を
上手く扱えないために妖力が足りなかったから

一時的な効力にしてみただけど…

意外とそれで良かったみたい。

「全く…底が知れないわね。二枚目行くわよ。」

『霊符・夢想封印』

でた、魔理沙とやってる時に使ったやつ。

一回見たからある程度は軌道わかるけど…

わかったからと言って避けられるわけではない。

何回か被弾してしまう。

お札だから妖怪には効果抜群だ、凄く痛い。

さっきのすべるカードが使えて自信が出てきた

もう一枚も使ってみよう。

すべるカードの効果は全面に出るように

弾幕を避けつつ霊夢に近づく。
やっぱり近いと避けづらい……
なんとか二十尺ほどまで近づけた。
これで準備万端だ。

「なら私も……二枚目！」

『月光・満月』

その瞬間、さつき消した弾幕が
私を基準として再び出現した。

よし！成功した。

新月で消した弾幕を満月で出現させる。

満月と新月は二つで一つのようなものだ。

片方がなければもう片方は使えない。

本当は新月で完結させたかったけど……

妖力的にもあんまり長く消滅させられないから

満月も作ることにしたんだ。

霊夢は少し驚いた顔をしたが

難なく弾幕を避けてしまった。

「……これは予想外だわ

でもまだまだ甘いわね。これで終わりよ」

成功した……けど霊夢には効果なかったみたい。

一際大きい陰陽玉を放ってきた。

うーん……これは手詰まりかなあ？

すべるか……二枚使っちゃったし

私の負けだね。

私はなす術なく陰陽玉に飲み込まれた。

—————

「負けた。」

ちよつと悔しいな。

ちゃんと負けた感じがして。

「まあ最初にしては上出来よ。

まさかあんなスペカ使うなんて」

そんなにすごい技だったのか。

「…そうね、飛べるようにもなったし

今度人里に行ってみましようか。

寺子屋に挨拶も行きたいし」

おお、寺子屋。

飛べないといけなかったのか。

楽しみが増えた。

「随分汚れちゃったわね。

先にお風呂入ってきなさい」

「はい」

結構動いたから疲れた。

お風呂はいつてお昼まで寝よう。

寝てばっかだなあ、私。

――

――

――

「…やっぱり悪い予感がするわ。加えてあの才能…」

一見ただの妖怪。

しかし初陣にしてあの身のこなし

私でも防げない強制ブレイク。

ただの弱小妖怪ではないことは明らかである。

見た目と精神が一致しない事も気にかかる。

強すぎる力が故に封印され、力を抑えられている

可能性がある。ルーミアのように。

「今度こっそり調べてみましょう。」

…杞憂になってくれればいいのだけど。

人里到る道は遠く

霊夢との模擬戦から数日。その間も飛ぶ練習とかすぺるかーどの練習とかいろいろやって結構慣れてきた。箸は相変わらずだが。

さて、今日は人里の見学に行くことになった。前にも言ってた「慧音」という人に挨拶しに行くとのこと。半人半妖という珍しい種族だとか。よく考えたら半分人とは言え他の妖怪に会うのは初めて。人里にはいろんなお店があるらしいし、楽しみだ。

この前は飛んで行くとか言ってたけどなんやかんやあつて歩いていくことになった。神社から人里まで約半刻、散歩にちょうどいいくらい。

「紅月ちよつと来て」

呼ばれた。もう出発するのかな？

「何？」

「今妖怪退治の依頼が入っちゃってね…妖怪の山に行かなくちゃならなくなっちゃったから、一人で人里に行ける？」

「え…道わからないよ？」

「大丈夫よ、その階段降りて道なりに進むだけだから。着いたらこれを門番に見せなさい。そしたら慧音の家に連れて行ってくれるから」

「…はい」

妖怪退治か。退治される対象ではないとはいえちよつと恐縮してしまう。

「それじゃ、私はもう行くから。気をつけていくのよ」
「うん。」

行ってしまった。私も出発しようかな。降りて真っ直ぐだったよね。すぺるかーどの案でも出しながら行こうかな。相手の弾幕に依存しないのが欲しいな。自分からいろいろ展開できるようなもの。あんまり弾幕を多く出しても疲れちゃうから……

1

1

――

「…よし、出発したみたいね。紫、お願い」

「はいはい。…本当にいいの?」

「ええ。」

前回の模擬戦で紅月はなんらかの封印を施されている可能性を感じたため、紫に記憶の傍受と封印の探知を手伝ってもらうことにした。

歩いて行かせたのはその時間稼ぎだ。

「分かったわ。…でも彼女厄介な能力を持っていたわよね?あなたの能力で対処できそう?」

「…やってみないとわからない。けど多分大丈夫だと思うわ。少なくとも今の状態なら能力練度で負けない」

「…よし。なら始めるわ。」

紅月は「精神的な干渉を受けない程度の能力」を持っている。その名の通りの能力で、普通なら今から私達がやろうとしている記憶の覗き見は能力により妨害されてしまうだろう。だから私の能力を使う。

「浮く程度の能力」

これが私の能力だ。紫にこの能力の効果を付与して覗き見してもらうという作戦だ。

「…どう?何かがある?」

「…紅月は生まれて一年程度のはずよね?なら可笑しいわ。何かに妨害…もとい結界をはられててよくは見れないけど記憶の列が少なくとも

数千年あるわ…。霊夢のいう通りになりそうね」

「!やっぱり…」

やっぱり何が悪事を働いて…

「…でも不思議だわ。悪意を全く感じない。こういう類の妖怪は封印されても強い悪意を放つことが多いのに」

「…どういうこと?」

「もしかしたら彼女は何も悪事を働いていないのに、大妖怪っていう理由だけで封印された可能性があるってこと」

悪事を働かずして封印された…？ということとは友好的な妖怪だったってことね。一方的に攻撃していたのに殺せず、やむなく封印したってこと？何か矛盾している気がする。

「それと…この封印、私でも解けないわ」

「え？そんなに複雑なの？」

「…複雑というか…この類の封印術は見たことないわ。封印かどうかも怪しいし…」

紫でも見たことがない封印を…？紅月…あなたは一体何者なの？

――

――

――

同刻、紅月 side

もうだいたい歩いた。もうそろそろ着いてもいい頃だ。

「ガールルッ！」

「…？」

唸り声が聞こえた…？犬でもいるのかな？

「ガールルル！」

「ガウッ！」

「ガウガウッ」

「…っ！」

違う…妖怪だ。妖怪の群れ。この前霊夢に教えてもらった。幻想郷にもまだ低級妖怪が存在してそいつらには知性がないからすべからどるーるが通じないって…

「ガアッ！」

「きやつ！」

私に目掛けて一斉に牙を剥いてくる。その一撃は弾幕なんて生温いものじゃない、本気で命を刈り取ってくる。霊夢曰く妖怪としての力はすごく弱いから私なら簡単に倒せるらしい。けどそれができなかった。

「ガアッ！」

「ひっ…！」

体が思うように動かない。魔理沙と霊夢の試合の時も霊夢との模擬戦の時も…私を感じていなかった、本気の殺気。それに私は圧倒されてしまっていた。

「ガウツ！」

「いたっ…！」

右腕を噛まれた。それだけで私の防御は一気に崩される。噛まれた痛みで体幹が傾いた。その瞬間を逃さず、他の2匹飛びかかってくる。

「ガアツ！」

「あがつ…！」

1匹が私の首筋に噛み付き、肉を喰いちぎった。鮮血が舞う。かろうじて抵抗していた右腕も動かなくなり、倒れ込む。ここぞとばかりに倒れた私の上に乗リ腕や足、腹の肉を喰いちぎる。精一杯の声を出して助けを求めようとする。

「あえ…おえ…！」

しかしまともな声は出ず、嗚咽混じりの汚い声しか出ない。死ぬ。このままでは…でももう何もできない、痛みも何も感じなくなってきた。体はすでに微動だにしない。視界も少しずつぼやけてきた。

グチャ…グチャ…メキツ…

私の体を貪る音だけが聞こえる。もう…だめだ、考えることすらままならない。視界が真っ暗になった、意識ももう消えそうだ。もう助からない、完全に思考を放棄し…

「お前！大丈夫か!?ちっ…邪魔だ雑魚共！」

『滅罪・正直者の死』

誰かの声を最後に、私の意識は途絶えた。

人里到る道は遠く…

「…また妖怪退治の依頼かよ」

今は秋も暮れだ、

冬に備えて妖獣系統が活発になるのはいつものことだが…今の状況は異常だ。

今月妖獣に襲われて死亡した例が4件、

怪我の例が18件…

なくなつた人の中には里を守る兵士もいた。

妖獣は訓練した者ならば簡単…とはいかないが

そこまで苦戦せずとも倒せる。

今まで妖獣による兵の死亡例はなく、

兵士の死亡例は全て中級妖怪の侵攻によるものだ。

つまり何が言いたいかと言うと…

妖獣…もとい妖怪が強力かつ

凶暴化している可能性がある。

風の噂だが、あの西行妖の桜の花が

咲き始めたと言うし…

「ちっ…何が原因かわからないな」

生憎私にはそこまでいい

頭がないから分からないが…

さつさと原因がわかればいいんだけど。

「ま、あーだこーだ言う前に依頼こなさないよ。」

…でも全く見当たらないな。

どこに行ったんだか」

人里から博麗神社への道の間に

現れたと言う情報だったが…

もう一往復して人里についてしまう。

嘘の依頼だったのだろうか…

ガアツ… ガルルツ…

「…!!」

獣の声…少し遠いが恐らく妖獣だ…
何かに敵対しているような唸り声。
まずい、誰かが襲われているかもしれない。
急がなければ。

「ガアッ！」

近づいてきた…こっちか！

「…っ!!お前！大丈夫か!？」

ちっ…邪魔だ雑魚共！」

『滅罪・正直者の死』

幼獣の姿が見えた瞬間ありったけの
弾幕を打ち込んでやった。

倒れている奴がいたため当たらない留意したが…

「遅かったか…？」

倒れ伏したモノの腕や脚、

首からは筋繊維が見え、

腹からは物が出てしまっている。

人間なら到底生きているとは思えない。

…人間ならの話だが。

「傷がほんの少しだが回復してきてるな

…妖怪か…？」

妖怪だとして、こんなやつは始めて見たな。

新生の妖怪がふらふら歩いてたら襲われたのか？

どちらにしろ放つては置けない。

私は医療系の知識が皆無だ、必要ないから。

慧音に頼むか…

「よしよしよっ…とっ」

とりあえず背負って寺子屋に持つてくことにした。

背中に血が流れる感覚が伝わる。

何回死んでも血が冷たくなっていく

感覚には慣れないな。

すこし歩くと人里の入り口に着いた。

今回の妖獣も随分と人里近くに現れたな…
慧音達に知らせないと危ない。

すこし足を早めて寺子屋に向かう。

今日は授業がない日だったはずだ。

…ん、いたいた。

「慧音、ちよつといいか？」

「うん？どうしたんだもこ…うわっ!？」

どうしたんだその血は!？」

めっちゃ驚かれた。そりやそうか。

依頼行ってくるって言って

血塗れで帰ってきたも私も心配する。

「いや、私の血じゃない。こいつのだ」

「こいつ？…！怪我してるのか？」

「ああ。妖獣に襲われていた。

妖怪だから大丈夫だと思っただけ…

一応連れてきた。」

「そ、そうか。こつちに来てくれ。

傷を見なければ…」

言われた通りに横に寝かせる。

出血はほとんど止まりほんの少しだが

傷も回復している。物も納まっている。

…とはいえ全く安全ともいえない状態だ。

噛みちぎられた肉も引き裂かれた

腹の傷も治っていない人間だったら死んでいる。

「これは…酷いな。

…ほんの少しだが縫合の心得がある。

焼け石に水かもしれないが。

…妹紅、井戸から水を汲んできてくれないか？

あと煮沸消毒もしてくれ」

「縫合…わかった、水だな。待ってろ」

井戸井戸…確か裏手にあつたよな。

少し駆け足になっている、

あまりに唐突で実感が無いが結構な惨劇だ
無意識のままに焦っているのだろう。

手早く水を汲み上げ、炎を使い沸騰させる。

少し熱を飛ばしたのちに慧音の元へ持っていく。

慧音は妖怪の着ているものを脱がせていた。

「ありがとう。体を拭くのを手伝ってくれないか？」

「ああ。」

裸になって肌を遮るものがなくなり、

傷がより痛痛しく見える。

全身に血がこびりつき、心地が悪そうだ。

物が出ていたところの傷はまだ出血が止まっていない。

「感染症も怖い。なるべく手早く頼む」

腕、胸、腹、背中、腰、股、脚…

とりあえず縫合に支障の出ない程度まで拭き取れた。

「よし、次は消毒だが…かなり染みるだろう。」

名前は知らないが少し耐えてくれ。」

この傷に消毒液…想像したくもない。

しかし消毒しなければ様々な病原菌に

侵される可能性がある。

そうだったらこいつはもつと辛い思いをする。

「…妹紅、一応体を押さえてくれ。」

万が一にも動いたら傷が開くかもしれない」

「わかった」

言われた通り手を押さえておく。

…慧音は布に消毒液を染み込ませ

傷にそつと当てる。

「…うう…」

流石に痛みを感じたのか妖怪が呻き声を上げる。

大きな傷を全て拭き終え、次は縫合の段階だ。

切り傷は縫合すればなんとかなると思うけど…

「この噛みちぎられたところはどうするんだ？」

首とか結構持つてかれてるぞ…？」

「…包帯を巻いて外気と

あまり触れないようにする。

永遠亭に連れて行けば

何か変わるかもしれないが

生憎今日は出はらっているらしい。

縫合と同時に巻いておいてくれないか？」

「わかった」

慧音は慣れない手つきで針を通していく。

私も包帯を巻かなければ。

まず、一番傷ついたら危ない首に巻くことにする。

傷口から出てくる組織液を布が

吸収して皮膚が乾燥しないよう

柔らかい当て布に薬箱に入っている保湿剤をつける。

傷薬はどれを使えばいいか分からないから

つけないでおこう。これを傷に当てて…巻く。

呼吸に支障がないよう

且つずれないように慎重に巻き進める。

左腕：右腕：脇腹：下腹部：右太腿：

特に物が出ていた下腹部は損傷が酷かった。

当て布を切らずに二つ折りにし、当てる。

その上からサラシのように巻いて止めておく。

包帯を巻く方は終わった。

しかしこれは…

かなりの頻度で交換する必要があるそうだ。

最後に巻いた下腹部でさえ既に赤く滲んでいる。

さつき気づいたが、傷の修復も止まってしまっている。

妖力が底をついたのか。

「慧音、どうだ？」

「待ってくれ、いま糸を止める所だ…よし。」

こつちも終わった。

久々だから不安だったが…失敗がなくてよかった」

「そうか。…次はどうする？このまま放置か？」

「放置って…そうだな、私たちがやれる事はもうやった。

あとはこいつが回復するまで待つだけだ。

妖力が底をついたみたいだから…

2、3日は目を覚まさないだろう。

その間も包帯を巻き直したりしないといけない。

手伝ってくれるか？」

「勿論だ。…何もなんだろうな、こいつは」

「さあ…目を覚ましたら諸々聞こうじゃないか」

そうだ、今回の妖獣について伝えなきゃ。

「慧音、今回の妖獣だが…

またここから近い所だった」

「またか…何が起きているんだろうな…」

何かの異変、で済めばいいんだが…

何かそれよりも危険な物な気がしてならない。

杞憂で済めばいいけど…

壊憶と激情

もう…限界だ。思ったよりも進行が早かった…

「…ぐ…」

自分の意思で体が動かない、もう乗っ取られてしまっているのだろう。くっそ…やるしかないか。迷惑をかけるわけにはいかない。

「…」

彼女は怒るだろうか。言伝だけ残して去る形になってしまった。会いに帰りたいがもう手遅れだろう。

「ごめんね」

彼女は気づいてくれるだろう。

たった一人の仲間だから。

「…」

「…」

何か夢を見ていた気がする。なんの夢なのかは良く思い出せない。しかし、何か大切な…少しずつ意識が覚醒してきた。身体中がが酷く痛い、体にうまく力が入らない。なんでだろう…怪我した記憶なんてないけど…

「…う…」

ゆっくりと瞼を開ける。…家の中？私は家を持っていないはず…

「！紅月、起きたか」

…？誰だろうか、知らない人。コウゲツ？誰のことだろう。

「ひとまずよかった。どこか痛むところ…どこも痛むだろうが、どこか不調はないか？」

私のことを知っているのだろうか？生まれて一年人間は愚か同族ですら見たこともないのに。

「…誰？」

ひとまず相手の名前を聞いてみる。

「私は上白沢慧音だ。寺子屋の教師をしている」

慧音。うん、もちろん知らないね。どういう状況だ？朝起きてみた

ら知らない人の家で、しかも凄い美人に話しかけられた。

「なんでここに…?」

「妖獣に襲われたのを覚えていないのか?」

「妖獣…?」

…襲われたっけ、うーん? 昨日は普通に寝た気がするんだけどなあ? 寝てる間に襲われちゃったのかな?

「そっか、霊夢に連絡しなければいけないな。何かあったら呼んでくれ妹紅が対応してくれる」

…行ってしまった。落ち着こうか、こういうときは落ち着いて現状を把握するべきだ。

「痛っ…うわ…」

血とか膿まみれで気持ち悪い。体を洗いたいな…あ、井戸ある。借りてもいいかな。借りよう。

「よいしょ…うわっ!」

左足に力が入らない。うわ…見るとふくらはぎの肉がごっそり欠けてしまっている。これ歩く無理だ、なんか杖代わりになる物ないかな?

「うーん…刀」

あの人のものだと思うけど…借りてもいいかな?

「か、借りまーす。よいしょっと…」

ふらつきながら庭に向かう。やばっ、床に刺しちやった。これ切れ味すごいね。…うん?

「ぬ、抜けない…」

思いつきり力を入れて抜く、怪我してしまっているせいかわからないけど全然抜けないんだけど。どうしよう、

「紅月、起きたの…なにやってんだ!」

「うわっ!」

「おいおい…まだ治ってないんだから安静にしててくれよ」

「ご、ごめんなさい…血が気持ち悪くて…」

「血か? わかった、拭いてやるから布団に戻れ」

「はい…」

びつくりした。そして怒られた、でも優しい人だなあ。口調がちよつと怖いけど。

「誰だよ刀ブツ刺したやつ…」

あ、私です…怒られたくないから黙ってしよう。

「全く…で、傷はどうだ？まだ痛むか？」

「うん…少し」

「そうか…まあ仕方ないさ、生きてるだけありがたいと思うことだな」

最初死ぬくらいに酷かったのか…。でもそんなにひどい傷を負ったのに起きないことなんてあるかな？普通痛みで起きると思うんだけどな。

「うわっ…これは着替えたほうがいいな。自分で脱げるか？」

「うん」

よく見たらいつもきてる服と違う。この人のものだろうか？そうだとしたらだいぶ申し訳ない、借りた上に血塗れにしてしまった。

浴衣地の下着を脱ぐと赤く染まった包帯が現れた。気持ち悪い…そういえば名前も知らない人の前で裸になっている。今更だし同性だけど意識したら少し恥ずかしくなってきた…

「そんな恥ずかしいがることないだろ、同性なんだし…包帯かえるぞ、傷に張り付いて痛いかもしれないが耐えてくれ」

私の恥じらいは一蹴されましたとき。

ペリペリと音を立てて包帯が剥がれる。痛みよりも自分の皮膚がめくれる不快感が押し寄せてくる。剥がしたところを布で拭いて、新しい包帯で巻いて、剥がして、拭いて…顔腕、胸ときてお腹にきた。一番膿やら血がたくさん出ているところだ。

他の部位と同じように剥がしていく…途中からあるはずの肉がないことに気付いて、ちよつと青ざめた。思ったより重症だったんだ。

…うーん、やつぱり不思議だ。この人は襲われたときのこと知ってるかな？聞いてみよう。

「あの…」

「うん？何だ？」

「私、どんな風に襲われたんですってっけ」

「どんなふうにも？人里に向かう途中で襲われたのかみたいだが…覚えてないのか？」

「…人里に？」

「おかしいぞ？人里に向かおうなんて今まで考えたことなかったと思うけど。」

「霊夢と魔理沙もお前のこと心配してたぞ、霊夢なんて『紅月に歩いて行けと言ったばかりに』って落ち込んでたしな」

「れいむ？まりさ？誰のことだろうか。」

「…薄々感じていたけど気のせいではないみたいだ。私と彼女の認識にずれがあるように思える。レイムもマリサもコウゲツも誰だかわからない。思い切って聞いてみようか。」

「…コウゲツって、誰ですか？」

「…はあ？」

「すっごい間抜けな声を上げた。そんなに呆れることですか…？」

「…え、つと？紅月はお前だろ。頭でも打ったのか？」

「…はあ？」

「今度がわたしが間抜けな声をあげてしまった。私がコウゲツ？何かの間違えじゃないだろうか。わたしはわたしだ、名前はなし。」

「え、私がですか？」

「そうだよ。私もあんたのことをよく知らないが…霊夢が慧音のところに寄越すはずだったらしいが…本当に覚えていないんだな？」

「覚えてない…？」

「覚えていない…記憶喪失というやつだろうか。意外と落ち着いているものなんだ、もつと不安になると思ってたけど。」

「記憶喪失か？失血とかでもなるr「紅月!!」お、霊夢」

「急に誰が入ってきた、びっくりした…っ!?何だろう…この人を見る…：なんか…：なんか、すごく…」

「紅月うっっ!!」

「殺してやりたくなる…あれ、なんで？巫女服の女を勝手に殴っていた。…急に沸いた怒りが増幅する。ああ駄目だ、抑えられない…手が震える、意思通りに体が動かない。私のものだという刀を取り動かな

かったはずの足で勝手に立ち上がる。

「なにをしている!」

「…ツ…」

「霊夢離れろ!」

落ち着け…落ち着くんんだ私。この赤熱した怒りを鎮めなければ…
いけないのに、なんで…なんで?

「なんで…?」

動かない…動けない。私の体が私のものではないかのように…

「…う…はあ!!」

刀を振るってしまふ。間にあつた襖を両断した。慧音さん達に当たらなかつたことに安堵するが…追撃しようと体がまた勝手に動き始める。なんとか抵抗するがきつとすぐに負けてしまふだろう。

「霊夢、怒りの矛先はお前のようだ。一回出てくれないか」

「…わかつたわ」

レイム、と呼ばれた人間(?)が部屋から出て行つた。その瞬間、私の中にあつた感情は収まつた。

「…はあ…はあ…」

気を張っていたからかとても疲れた。興奮してなくなっていた痛みが蘇り、倒れこんでしまふ。記憶がなくなったことといい、このことといい一体何なんだ…

「大丈夫か? 紅月」

妹紅さんが問いかけてくれる。大丈夫だった、結果的に誰にも怪我を負わさなかつたけど、もしあの一振りが霊夢さんに当たっていたら…そう考えると手が震える。

「どうやら訳ありのようだな…私たちも引いたほうがいいだろう、落ち着いたら呼んでくれ。行くぞ、妹紅」

「うん」

二人とも出て行つた、まだ手が震える。

突然襲つてきた謎の激情、記憶の喪失。この二つは私に恐怖を感じさせるのに十分すぎる材料になる。

しかし私が今感じている恐怖の対象はそれら二つの出来事が原因

ではない。

私が恐怖したのは人を殺すことに恐怖と共に喜びを感じた自分に
対してだ。

謎との解析

「…どういうことだと思う?」

私は静寂に我慢できず質問を投げかけた。

「…というのは先ほど起きたことである。紅月が急に暴走した、以上だ。」

「…とりあえず問題点を整理しよう。」

問題1、紅月の記憶について

問題2、紅月の暴走について

この二つになるが…まず問題1からだ。霊夢、何か心当たりはあるか?」

「…あるわ。紅月がここに来る途中で紅月の記憶を覗き見したわ」

「記憶を?なんでだ?」

「…あの子の妖力が異常に多かったから、記憶を消されたり封印されたりした危険な妖怪の可能性があったのよ。彼女の能力でよくは見れなかったけど少なくとも記憶の鎖が100以上は繋がってたから封印されたみたい」

なるほど、その覗き見が原因だと考えられそうだけど…よくわからないな。

「お前んとこで住んでたんだろ?そんな時は大丈夫だったのか?」

「ええ、あんなことは初めてよ」

「今回の初めてか。あれか?怪我のせいで頭がおかしくなったとかか?…いや、違うか。輝夜んとこの医者とは異常なしって言ってたもん。永琳は腕は確かだからな。」

「…ちよつと待って、紫にも聞いたほうがいいかもしれないわ。あいつも一緒に見たから。…紫!出てきて!」

うげつ、あの隙間妖怪かよ…なんかあいつ苦手なんだよな。見透かされてる感じがするし胡散臭いし…

「胡散臭くて悪かったわね、妹紅」

「うげつ…」

絡まれたよ…黙っておこ。

「あらあら、呼ばれたから来たのにひどい対応ね。」

まあいいわ、話は聞いてたわよ。何か知らないか聞きたいのね」

「ええ、何かおかしなものを見なかった？」

「見たわよ。ていうか見たもの殆どがおかしかったわ」

「…ほう。どうおかしかつたんだ？」

「…まず前提として伝えておくわ。紅月の能力は知ってる？」

「いや、知らん」

「私もだ」

『『精神的干渉を受けない程度の能力』まあ効果は文字通りね。具体的にいうと記憶操作とか催眠とかが効かないってこと。だから記憶封印はもちろん紅月の封印をすることも難しいわ。』

精神的干渉をねえ：

なかなか強力な能力じゃないか。

「なら今回の記憶喪失は怪我が原因で決定だな。」

「いや、それがそうともいえないのよ」

「…はあ？」

記憶操作とか効かねえってきつき言ったじゃねえか…前提ごと間違ってるってことか？

「どういうことだ？八雲殿」

「記憶を見たりする時にはまず精神空間に入る必要があつてね。霊夢は見なかっただろうけどその空間によくわからない封印の跡がいくつもあつたわ。調べてみたら殆どがよくわからないものでね、いくつか封印しているものの概要がわかつただけ…。記憶が封印されていたみたいなの」

「…詳しくはわからなかったの？」

「ええ。霊夢の能力で無理やり開けていたから、記憶に対しでどう効果を示しているかわからなかったわ…」

その封印のせいで記憶がおかしくなつたってことか？でも何を引き金にその封印効果が出たんだ？やっぱり怪我が？

…まてよっ？

「でも誰が封印したんだ？記憶操作とか効かないんだろ？」

「ええ。干渉『は』、受けないからね」

…だめだ、わからん。さつきから矛盾してるじゃねえか…干渉受けないって言った側から封印されたーとか…。頭いい奴の考えることはわからんな。…うん？干渉、は？

「…自分で封印したってことか？」

「その線が濃厚ね。霊夢みたいな規格外な能力を持つてる人が封印可能性もあるけど…まあ、それはないと言っていいでしょう」

自分で自分をねえ…たしかに干渉を受けたことにならない、他者から何かを影響を受けることが干渉の定義だったはずだ。

「確かに納得できる推理だが…自分を封印した目的はなんだ？どこにも利点がないような気がするが…」

「そこが謎なのよね。ま、今私ができることは記憶の障害は封印のせいでその封印を施したのは紅月自身、ってことだけね」

「まだ謎が多いわね…。ありがとう、紫。聞きたかったことはそれだけだから戻って」

「はいはい。」

お、帰った。気が楽になる。あいつ胡散臭い上になんか妙な威圧感があるから…。

そんなこと考えてる場合じゃないな。大体納得したが…何が引き金になって記憶損失が起こるかがわからないな。そんな頻繁に忘れられても困る。霊夢と慧音も何か思うところがあるのか黙ったままだ。あまり紅月を待たせるわけにもいかないから私が進行させるか。

次は問題2についてでいいよな。

「で、次は暴走についてか？」

「…そうね。急に襲われたけど…妹紅、私が入る前に何かなかった？」

霊夢が入る前か。刀ぶっ刺してしゃがみ込んでたけど、血を拭きたいから移動しようとしてただけだから特に問題はないか。記憶がなくなってたから多少変な会話になったが…そのあとの会話も変なところはなかったよな。

「いや、何もなかったぞ。」

「そう…」

「一つ、いいか？ただの憶測なんだが…」

慧音が手を上げた。かなり真剣な表情だ。

「憶測の前に一つ聞きたい。妹紅、お前の種族はなんだ？」

「種族？私のか？」

私の種族か、なんとも言えないな。私は人間なのか？妖怪ではないと思うけど…弾幕で使っているのは霊力だから人間か？でも閻魔が言うに魂

が輪廻から解脱している私は人間じゃないって言ってたし…

「…うーん？」

「うーんって…わからないの？」

「いや、人間ではないってことは確かに言えるんだけど。いぎ種族はなんだって聞かれるとなんで言えばいいか…」

「へえ、不便ね。」

「人間ではない、と言うのは確かだな？」

「う、うん。閻魔も言ってたから多分は…」

あんま強く聞かれると自信が揺らぐからやめてほしい。

本当になんて言えばいいんだろうな不死人とか？

「そうか。なら私の仮説に筋が通る。」

説明するぞ。彼女の暴走は恐らく彼女自身をで封印をする前の出来事が原因だと私は考えた。少なくとも霊夢との生活の中で原因が生まれたという可能性は無いと思う。そして暴走の引き金となるのは…恐らく人間、だろう」

「人間？」

「ああ、そうだ。まず根拠の一つとして『霊夢が入った瞬間』に紅月が豹変したことが挙げられる」

「まあ、そうね。他には？」

「二つ、邪魔をするものを無視して攻撃を続けたこと。」

妹紅、霊夢が殴られたあとかなり強く押し除けた上に霊夢と紅月の間に立ったな？」

「う、うん。立ったな」

突然のことだったから、けが人に対してお構いなしに突き飛ばして

しまった。一応あとで誤っておくか。

「私も彼女と霊夢の間に立った。しかし『私たちを無視して』霊夢に切りかかったよな?」

「…そうね。私に向かってきた。」

「妖怪の私と蓬萊人(?)とするが…まあ人外の妹紅。このふたりを無視して攻撃した点から人間の存在があああの暴走の引き金となったと考えられる。」

人間が…え、まずくね?…ここ人里ですよ?人間いっぱいいますよ?

「人間が…。」

「まだわからないことの方が多いな。」

とりあえずここに通わせることは一度なしにしよう。今回は被害が出なかつたからよかつたものの村の人々に危害を当てては取り返しがつかないからな。」

さつき霊夢に切りかかった後、紅月が手を震わせていた。恐らく誰かを殺めかけたことが原因だ。もし本当に殺してしまったら精神を病んでしまうかもしれない。

「わかつたわ。私とも暮らせなくなるわね…」

「引き取ってやりたいが…私のところも難しいな」

「放浪させるにもリスクが大きいから目の届くところにおいておきたいのよね」

「…人間があまり立ち入らないところじゃないと危険だよな」

「そうね…。ねえ、妹紅の家は駄目かしら?」

「えっ」

「…そうだな!竹林にはほとんど人が行かないし妹紅の家は竹林の深層部だからもってこいの場所だ」

「ま、まあいいけど…」

「それじゃあ早速今日からお願いするわ。荷物を持ってくるから紅月の方の準備をして」

「ぎ、今日からか?」

「…しばらくはもう一度永遠亭に預ける。荷物だけ持っておいてくれ。」

「…はいはい」

随分な厄介事を引き受けてしまった…恐らく見舞いも私がすることになるだろうな。まあ別に嫌なわけじゃないんだが…永遠亭には輝夜の野郎がいるからなあ…

「すみません、誰か来てもらえますか?」

紅月の声だ、どうやら落ち着いたらしい。

3人で決めて今日話した封印などについては紅月に伝えることにした。口を滑らさないように気をつけなければ…

彼女に引越す事を伝えなければいけない…永遠亭に話を通しておかなければ…布団が一枚しかないから買わなきゃ…ああ、やることたくさんだ。

「全く。とんだ貧乏くじを引いたなあ」

新居と制約

私が暴走してから一週間。あちこちに残っていた傷は癒えて塞がり、いつも通りの生活を送れるまでに回復した。お世話になった医者曰く足と腹、首の傷は残ってしまうらしい。実際結構な大きさの跡が残っている。まあそこまで気にしていないけど。

「準備はできたか？」

妹紅さんだ。

なんかあの後色々あつて霊夢の家から引越すことになった。霊夢からすれば殺しにかかってきた奴が四六時中自分のそばにいる状態だ。出て行けと言われるのに文句はない。そんな強く言われたわけではないけどね。

「うん。」

「そうか。じゃあ行くぞ」

妖獣に襲われてから約半月、やっと退院だ。最初霊夢の家を出ないといけないと言われた時、また野宿生活に戻るのかと思っていたが妹紅さんが家を貸してくれるらしい。他にもお見舞いに来てくれたり色々お世話になった。感謝してもしきれないな。

永琳さんと輝夜さんに挨拶を済ませ、永遠亭を後にする。あの騒動の後妹紅さんから無くした期間の記憶のことを教えてもらった。名前のこと、魔理沙さんのこととか色々。妖力については『そんなこと』と半分不信に思いつつも言われた通りに強く想像したらなんかよくわからない球体が出てきたからびっくりした。スペルカードも最初見せてもらった時…いや何回かは見たことがあるはずだけでも…とても綺麗で驚いた。

「もう傷は全部塞がったのか？」

「はい、多少後は残っているけど塞がりました。」

「そうか、良かった。…あ、一応言っておくけど敬語じゃなくていいぞ。堅苦しいのは嫌いだ。」

「…わかった」

敬語で話すのになれていたからちよつと変な感じがする。

永遠亭を出て黙々と竹林を歩く。妹紅さんから再三「離れるな」と釘を打たれた。ここは迷いの竹林と言われているらしく、歩きなれない人が足を踏み入れるとすぐに方向がわからなくなり迷ってしまうらしい。

…それにしても結構歩いたけど、一向に竹林を抜ける気配がないな。そんなにこの竹林は広いのか?…もしかして迷ってるのかないよね。

「…妹紅さんの家ってどこにあるんですか?」

「この竹林の中だ、結構人里よりだけどな。あと呼び方。さん付けしなくていい、なんかムズムズする」

「…わかったよ。」

明らかに年上だし色々お世話になったから呼び捨てはまずいと思っただけど…まあ本人から了承が得られれば呼び捨てにしてもいいかな。

「…あ」

何か建物が竹林に紛れて見えてきた、あれかな?

「あれだ、霊夢んどこみたいに広くはないが…まあ二人が生活するのに問題ないくらいの広さはある。荷物も霊夢から預かってるから心配するな。」

知らないうちに色々やつてもらってたみたいだ。なんか助けてもらってばかりで申し訳ない。

「ありがとう。迷惑ばかりかけてごめんなさい…」

「…タダでやつてるわけではないから謝らなくていい。」

「…?…どういうこと?」

「…まあ隠しておくのもなんか嫌だし教えるか。」

前の一件で紫に目をつけられた、だから監視の目的を兼ねて住まわせることになった。」

「監視?」

「ああ。気付いていないかもしれないが、お前はは大妖怪に並ぶくらいの妖力を持っている。お前からは悪意を感じないが…まあ万が一ということがないように私が監視することになった」

「…」

結構大事になってみたい。大妖怪に並ぶ妖力？そんなにあつたの？予想以上に自分は規格外な存在みたいだ。しかも監視されるのか、どんな感じになるんだろう。

「監視って言ってもそこまで厳しくはない。殆どいつもと変わらないからあまり気にする必要はないと思う。私自身そこまで気にして過ごすつもりはない。」

気にするなと言われてもなあ…でも深く考えないのが正解かな。

「ただし、一っだけ制約が設けられてな… 人里はの立ち入りは禁止とすることになった。」

「禁止…」

さつきからどんどんキツイ言葉が出てきて言葉に詰まる。多分決めたあの賢者の人だろうな。紫さんだっけ？あの人に目をつけられてしまったのか…なんか怖いな。

「さつきも言ったが万が一、ということがあるからな。もし人里で暴走されたらお前を退治することになっちゃう。私らも好き好んで妖怪を退治してるわけではないんだ、そこは理解してくれるとありがたい。」

もちろんさつきの要求を蹴るつもりはない。こつちとしてもこれ以上迷惑をかけたくないし、目をつけられたくないからね…紫さんちよつと不気味だから苦手だ。いつも考えていることを見透かされてるような気がする。

「私も退治されたくないから従うよ。」

「助かる、着いたぞ。」

色々言ってるうちに妹紅さんの家に着いた。

「ただいまーつと。向こうの部屋は好きに使っていいから適当に時間を潰していてくれ、私は昼を作るから。」

「はい」

自分の荷物の整理…は服と刀しかないからやる意味ないか。家の探検でもしようかな。

「…柵でっか」

1番上の段に手が届かない。妹紅さんはこれ届くのかな？背高いな。私はやつぱり三寸くらい足りない。：今思えば霊夢さんも慧音さんも背が高かった。妹紅さんは見た感じ五尺と三寸強くらいありそう。私は五尺もないからちよつと羨ましい。

「おぉー！」

隣に押し入れ、その中には新品のものと思われる布団が入っている。：私のためにわざわざ買ってくれたりしたのかな？そういうえば食事の面倒も見てもらうことになるし。急に申し訳なきが加速してきた、どうしよう。仕事のお手伝いとかしたほうがいいかな。

「後で聞いてみよ。」

「何をだ？」

「うわっ」

いつのまに、聞いていたのか。

「うわって：私の家なんだからいて当然だろ。飯ができたから早く来い。」

もうできたの？作るの早いな、まだ数分しか経ってないけど。まだ見てないところは後で回ればいいか。

「はーい」

記憶喪失だったりよくわからない衝動が襲ってきたりとかして不安だったけど大丈夫そうだ、妹紅さ：妹紅も優しいし。

このまま平和に時間が過ぎてくれるといいなあ。

鍛錬つて辛くない？

「よし、鍛錬するぞ」

「…はい？」

朝ごはんを食べ終えてゆつくりしていたら突然なんか言い出した。
鍛錬…？急にどうしたんだろう。

「急にどうしたの？」

「この竹林にも下級妖怪はいるから、ある程度戦えるようになってもらわないと困る。仕事が入って出かけないといけないこともあるから」

えっ、ここにも妖怪出るの？初耳です。…また喰い殺されかけたくないから戦えるようになっておこう。

「はい、どこで？」

「家の前でいいだろ」

「わかった。どんなことするの？」

どんなことするんだろう、やっぱり素振りとかかな。

「まず妖力の使い方だな。お前が今思い浮かぶ妖力の使い方を言ってみろ。」

「えーつと、この刀みたいに武器にしたり、弾幕として飛ばしたり…？」

他にあるかな、ない気がするけど…

「…まあ及第点だな、他にもあるぞ。例えばこんなふう在空中に塊を作つて足場にしたり…」

そういうと妹紅は空中に立った。弾幕みたいに飛ばさないで一定の場所に留めておけば足場にできるんだ、頭いいな。

「あとは、自分の周りに水みたいに妖力を纏つて相手の動きを予測したり、もつと広い範囲に展開して侵入者を発見したりできる」

…どういうことだ？水みたいに展開して相手を予測。蜘蛛の巣みたいな仕組みかな。

「最後のは難しいと思うからまず糸を作ってみな」

「糸…糸…」

「これくらいなら私もできる。糸…
できたよ」

真っ白な糸が作れた、長さは八尺くらいかな。

「それを自分の前に浮かせる、糸を張った状態でな」

「糸を張って浮かせるの？」

「そうだ、まずはやってみて」

物を浮かせるのか、自分で飛んでみるのはできたけど物は浮くかな？とoriaあえず飛んでる様子を強く想像すればいいと思うけど。

「こんな感じでいい？」

浮いた浮いた。けどすんごく疲れる、集中しないとすぐに落ちてしまいそうだ。

「よくできたな。その糸はお前の妖力の一部だ、目を閉じて」

「うん」

「…糸を触っているのがわかるか？」

「…うーん、離してみても」

「ほい」

確かに触れている間だけちよつと違う感覚がする。ただ、これも集中していないと気付かないな。

「一応わかった」

「最初にしては上出来だ。じゃあその糸を元の妖力に戻して、『妖力』の状態で糸を作ってみろ」

「…？」

何言ってるかわからないデス。妖力の状態ですってこの糸も妖力じゃん？

「…あー、じゃあその後の周りに妖力を纏わせて」

それなら理解できる。妖力を纏わせてー、できた。

「できた」

「纏わせた妖力だけ残したまま糸を消せ」

「…」

そういえば一回作ったものを妖力に戻すのってどうすればできるんだらう。戻れって思えば戻るかな。

「…あつ、」

糸を元に戻せたけど周りの妖力まで吸収しちゃった。

「まあ抽象的な形に固定するのは難しいからすぐにできなくても仕方ないさ、今日は妖力の糸を作る練習に集中しよう」

「はい…」

朝鍛錬を初めて2、3刻くらいがたった。一応妹紅のいう妖力の糸を作って維持できるようになり、やっと次の段階に進むことができ。妖力の糸の方が妖力で作った実体のある糸よりも触られた感触が強かった。…自分でも何を言ってるかよくわからない、ややこしい。

「結構安定してきたな、次に進もう。妖力の糸を自分を中心とした蜘蛛の巣状に展開する。」

「…あー、もう難しそう」

「もう妖力の糸はできてるんだから意外と簡単だよ、」

つべこべ言っついても始まらないからとりあえずやってみよ。自分を中心にして蜘蛛の巣状に展開する。蜘蛛の巣…。蜘蛛きらい…

「ん？範囲は狭いができてるな。もっと広い範囲に伸ばせるか？」

「もっと広く？どのくらい」

「…半径4kmの球くらい」

「4きろめーとる？」

きろめーとるってなんだろう。長さの単位かな？尺とか町とか…尺度法(？)で言われないとわからない…

「…m法知らないのか。えーっと…一里か？」

「一里ね…一里!?!」

広くない？妖力足りるかな…。今の展開できてる範囲の何倍だろう…千倍とか？半径一里の球…。いいや、とりあえず適当に全力で展開しちゃえ。

「…うおつ、今度は広すぎだ。もっと抑えろ」

「ええ…どのくらい？」

「今の三分の一程度でいい」

調整って難しい。三分の一、三分の一…このくらいかな。

「…うん、これなら十分だろ。これは最初に言ったと思うが探知の手法だ。理論上はこの竹林で動くもののほとんどを、お前は感知できる。」

「…本当に？何も感じないけど？」

「誰も触れていないだけだと思うが…一度妖力の糸を収めてくれ。」

「はい」

「今から私はこの竹林の中のどこかに行く。この弾幕が強くと光った瞬間にもう一度妖力を展開しろ。うまくいけば私の動きが探知されるはずだから私のところまで来い。」

早速実践か、できるかな。正直に言っちゃうと妖力の部分触られてもよくわかんないんだよね。「触られた」って感じより「違和感」。

「十秒後くらいに光るから、じゃあスタートだ。」

どっか行った、足速いなあ。妖力…いや霊力か、霊力で強化してるのかな、もう姿が見えない。十秒だったらそこまで遠くまでいけないとか思ってたけどあの速さだと結構な距離まで行っちゃいそうだな。

「…あ、光った。」

よし、とりあえず展開しよう。うう…妖力が分散しちゃうのどうにかしないと効率が悪い…。ていうか妹紅いなくなる？もうちよつと派手に動いてもらわないとわからない。

「…うーん」

…妖力の量を増やしてみようか、そうすれば感覚が強くなるかもしれない。密度を二倍にしてみよう。

…やっぱり変わらないかあ、どうしたものか。

妹紅は妖力は体の一部だからわかるはずって言った。そういえば妹紅が私の刀を運んでくれたとき見てなかったのに「刀運んでくれるな」ってわかったつけ。あれは私の妖力でできた刀だったから…？

そうか！刀と同じでこの展開している妖力は私の腕や足と同じものだと思えばいいんだ。この妖力は私の腕、一部だ。見ていなくても

自分の体の位置はわかる。どこを触れられてるのかわかるはず。

「…」

誰もいない。永遠亭だと思う場所に気配がするけど…永琳さんに輝夜さん、鈴仙さんとてみちゃん…うん？

「あつー！一人多い」

永遠亭に人が五人いる、多分あそこに紛れ込んでるな。普通に患者さんの可能性もあるけど、まあとりあえず行ってみよう。

…そういえばこの手法を使ったらこの竹林でも迷わずに移動できるね。妹紅はこれも見越してこの訓練を提案したのかな、ただの思いつきじゃなくて意外と考えていた。

そうこう言ってるうちに着いた。絶対ここにいるとは言い切れないからまず永琳さんあたりに聞いてみよ

「すみませーん、誰かいますか？」

「はいはい、ってどうしたの紅月。何か不調でもあるの？」

輝夜さんが出てきた、他の人は取り込み中かな。

「突然すみません、妹紅きてませんか？」

「妹紅？来てるけど…」

お、当たった！良かった、これで妖力使った探知の基礎は習得できたことになるかな？今のままで効率が悪いから、明日以降長時間この状態を維持できるように練習しよう。

「急に来たから何事かと思ったわ、なにかの訓練中？」

「ああ」

「理由があるなら言ってみよ、急に押し入ってくるなんて…」

「面倒臭い」

「ええ…？」

「よし、帰るぞ紅月」

すつごい一方的な会話だった、この2人仲がいいのか悪いのかわからない。

「明日からは実用に向けての練習だな。他にも武術と剣術も教えてやる。お前の妖力なら短期間である程度戦えるようになる。…まあちよつとキツイ内容になるかもしれないが、まあ頑張れ。」

「…はい。」
「ま、まあ生き残るためだから仕方ない。でも痛いのは嫌だなあ…。」

紅魔異変

初めての異変

鍛錬を始めて一週間ほど。剣術、武術を習い自分でも結構上達したと思う。妹紅は「一週間でここまで上達するなんて大したもんだ」と驚いていた。褒められているみたいでちよつと嬉しかった。

今日は妹紅は出かけている。妖怪の山方面で妖怪退治の任務があるらしい。だから今日は留守番を頼まれている。頼まれているからには家にいなければいけないと思うのだが…

「なんだろう…この霧」

今朝から何故か竹林が赤い霧に覆われている。何か特殊な自然現象かなーと思っていたがどうもそうではないみたいだ。この霧からは何か力を感じる。妖力…？魔力…？どんな力かはわからないけど。つまりは誰かが意図的に発生させたものだと思う。そしてその発生源だと思われる場所が分かった。ここから真北に行つたところに大きな魔力を感じる。たぶんそこらへんからこの霧が出ていると思う。

「…どうしようかな」

とてつもない好奇心。まだ幻想郷の地理に詳しくないから探検したい気持ちと相まって発生源を探しに行きたい。

「…妹紅が帰ってくる前に済ませ大丈夫だよね」

…人里に近づかない、危なそうだったら帰ってくる。この二つを守ればたぶん怒られない、だろう、たぶん。一応刀持つてこう。

「よし、行こう」

この時私は知らなかった。この些細な事があんなに大きな異変になるなんて…

ー

ー

ー

「…うーん、結構遠いな」

竹林を出てかれこれ半刻ほど。まだ発生源だと思われるところまでは距離がある。ちよつと面倒くさくなつて来たな〜

「うわっ!？」

急に霧の密度：？霧に込められた妖力かなんかの密度が増えた。妖怪の私でもちよつと気分が悪くなるほどの妖力：人間が浴びたらかなりまずいと思うけど人里の人たちは大丈夫なのかな？

「なんか不味そうな気配：私が解決できそうだったらやったほうがよさそうだね。」

ちよつと先を急ごう。あんま長い時間この霧を浴びていたくない。

「…ん。あ、不味い。気づかなかった」

いろいろ考えていて周りの警戒を怠っていた。気づくと数匹の妖怪と遭遇していた。何故か気が立っているようだ。

「また喰われるのは嫌だから抵抗させてもらうよ」

刀を抜き構える。前に遭遇したよう下級の妖怪ではなくある程度力を持った中等級程度の妖怪のようだ、周りと思疎通をして連携をとっている。

まだ実戦は二回目だ、前回の戦闘に関しては記憶がないから実質一回目。妹紅か、殺気を放つ相手との戦闘訓練を受けたが、それでもちよつと怖い。

「甲f右t。攻／?!」

左側にいた一匹が奇声を放ちながら飛びかかってくる。落ち着いて対処しよう、まずは相手の強さを知らないといけない。けどなんか長期戦になつて消耗しても不味いから一気に仕掛ける。

左から一直線に飛びかかってきた、動きが直線的だから予想しやすい。重心を左にずらし左に刀を抜く。

「3 t @ Z …」

「よし…次っ!」

相手が飛びかかってくる勢いを使って切りつける、首辺りからかなり深く切れたからたぶん殺せた。次だ、青眼の構えに戻す。敵はあと二匹。

次はこつちから仕掛けよう。青眼の構えから少し剣先を右下にず

らし重心を落とす。そして一気に敵の一体に斬りかかる、示現流の蜻蛉という技らしい相手の防御を気にせず斬り伏せることができる。

「はああああー！」

相手に避ける間もなく刀を振りかざす。頭を二つに切り分けられ絶命。残り一匹。

「結構余裕だったね」

ちよつと緊張したけど全然余裕で勝てそう。相手は力こそあれだ知能の低い中級、力の差を理解していないようでもまだやる気だ。

…そうだ、あの技を試してみよう。刀を納め重心を下げ、相手の動きを観察する。

「9 h m u t j … d, !」

飛びかかってくる。さっきの二体の頭領なのか他の二匹より動きが速い。

しかし妹紅の縮地よりは全然遅いし動きも読みやすい。恐らくこのまま直線的にかかってくるだろう。

「ツス——」

息を大きく吸って…妖力を限界まで刀に込めて…

「…墳ッ！」

思いつきり刀を抜く、居合斬りだ。刀が妖怪に接触した瞬間妖力を相手に流し込む。妹紅に教えてもらった、妖怪は妖力をしまう器があるらしい、そしてその器を超えるよう妖力を浴びてしまうと…

「h @ 3 Z …」

消滅してしまう。うん、聞いた通りだった。妖力量だけは馬鹿みたいに多いからこういう戦い方もできる、燃費悪いけど。

何はともあれ下中級妖怪には勝てるようになったみたいだ、これからは安心して暮らせる。

そういえば刀の名前決めてなかったな。これから使うときに不便だから帰ってから決めよう。

「…うん？」

また霧の密度が濃くなった…。どこまで濃くなるんだろう。この妖怪たちはこの霧のせいで気が立っていたのかな？目の前の敵に集

中してて気づかなかったがかなり辛い。これ以上濃くなったら流石に不味いから先を急ごう。

…返り血で服汚れちゃったな、妹紅に怒られる。

↓

↓

↓

…出かけるのが面倒くさかったから見て見ぬ振りしてたけど。

「流石にこれは看過できないわね…」

どんどん霧の魔力が濃くなってる。里の人間はもう耐えられず体を壊しているだろう。

「はあ…面倒くさいけど行かないとダメよね。はあ…」

なんでよりにもよってこのあつつい夏に異変なんて起こすのよ…解決しに行くこつちの身にもなってよね。ああ…面倒臭い。

「…さっさと終わらせて寝ましよう」

厄介な相手じゃないといいけど。

↓

↓

↓

妖怪と遭遇したところから少し、おっきな湖に出てきた。霧が濃くて遠くまで見渡せないがこちら辺に発生源がある。…ちよつとだけ妖力使っちゃおう。

「えいっ」

妖力を少し爆発させて霧を晴らす。すぐにまだ霧に覆われるがあたりを確認するには十分だ。

そして霧が晴れた湖の先に大きな館があることに気づいた。どうやらあの館から霧が出ているようだ。なにがしたいんだろう。

「…とりあえず行ってみよう」

行ってみるけど誰か住んでたら入るわけには行かないな。でもこのまま帰っても霧がなくなるわけじゃないし…無理だろうけどやめてくれて言ってみようか。

「…ん？門番？」

館の近くまで行くと館の門の横に門番らしき人が見えた。…あれ、寝てない？門番なのに寝てたらダメな気がする。誰か通っても気が付かないんじゃないかな。

「…今なら入れたりしないかな」

…怒られたら怒られただ。その時考えればいいや。

「おじやましまー」「はっ!!」「すっ!!」

館に一歩踏み出した瞬間に寝ていた門番が蹴りをかまして来た。刀でなんとか防いだが蹴りの勢いが凄まじく湖近くの木に激突する。

「うぐっ…」

「侵入者ですか…予想より早かったです…まあいいでしょう。門番の務めを果たすまでです。」

そう言うと門番は見たこともない構えを شدした。結構面倒なことに首を突っ込んでいるのかもしれない、まさか入ろうとしただけで蹴りを入れられるとは…

喧嘩をするつもりはない、どうにかして場を納めなければ…